
遙かなる聖戦

Glaray

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遙かなる聖戦

【Nコード】

N2929Y

【作者名】

G l a r a y

【あらすじ】

西暦1015年における地上の女神・アテナと冥王ハーデスの聖戦。

著者オリジナルです。原作登場キャラは一切出てきませんのでご了承下さい。

基本的に設定は原作に忠実ですが、原作には登場しない星座の聖闘士や魔星の冥闘士が登場します。

原作と比較したりして楽しんで頂ければ幸いです。感想お待ちしております。

前兆

O m e n (前書き)

タイトル若干変えました。

今後全部こんな感じで英語入れます。

前兆

Omen

永遠に戻って来られぬかも知れない闇の中にいるのだと思った。
彼女は地面に倒れていた。

打ちのめされた様に、僅かに立ち上がる気力も眼を開く気力も無い。

しかし、「自分がやらなければ他に誰がやるのか？」という警告染みた言葉が突如脳裏をよぎった。

彼女は渾身の力で手を地面に付き、体をやっとの思いで起こし、眼を僅かに開く。

点々と続く血の跡。

それを這うようにして辿っていく。

血の滴がポタポタと零れ落ち、池を造っていた。

その上をやつと頭を起こして見上げる。

剣の切っ先であった。

彼女の額に滴が落ちた。

「もうこれで終わりだ」

声が響いた。

深淵から轟いている様な、恐ろしく低い、圧力のある声であった。
同時に、彼女の頭上に剣が振り下ろされる。

躲す術はなかった。

「きゃあああああ！！！」

彼女は自分の叫び声で目を覚ました。

石造りの寝台から勢いよく身を起こすと、窓から僅かに日の光が差し込んでいることに気が付いて胸をなで下ろした。暗闇の中に取

に残されていなかったからだ。

それにしても、今の夢は何だったのだろうか… 生々しい感覚がまだ残っており、動機がおさまらない。

「ア… アテナ!？」

突然、部屋の入り口の扉が乱暴に開き、入ってくる者があった。均整の取れた見事な長身に、割り方質素な布の服を着ている。豪奢だが芸術的な藍色の長髪を持つ美青年だが、その繊細な顔立ちは今狼狽してやや崩れている。

「… カライス?」

彼女・地上の女神・アテナは青年の姿を見て少し驚いた。自分はどれだけ大声で叫んでいたのだろうか… カライスはかなり遠くで寝ていたはずなのに。

「ごめんなさい、何でも無いのです。ただ… かなり怖い夢を見てしまつて」

アテナは寝台から下りると、来訪者に向かって微笑みかけた。太陽の輝きにも勝る、温かく眩しい笑顔だ。

それを認めると、カライスは女神にも劣らない穏やかで優しい笑顔を浮かべて返し、丁重に跪いた。本来彼はこういう雰囲気を持ち主のようだ。

「それなら安心です。ただ、貴女のお声が余りにも大きかったので、一体何事かと」

「こんな事は、滅多に無いことですからね…。本当にごめんなさい。とりあえず、外に出て話でもしませんか」

「御意」

カライスは身を起こし、先に部屋を出た。アテナもそれに付いて行った。

歩きながら彼女は考えていた - 嫌な予感がする。最近、教皇も玉座を外してよくスターヒルに登っているようだ…まさか。

聖戦

Holy War

「アテナ神殿」 - ここは聖域と呼ばれる一帯で最も神聖な場所で、岩山の頂上にある。アテナを守る88人の聖闘士セイントの中でも最強を誇る12人の黄金聖闘士ゴールドセイントがそれぞれ守護を任された宮殿、更には聖闘士達を統括しアテナを補佐する存在である者の「教皇の間」を一つずつ突破しなければ神殿に辿り着く事はできない。それゆえ神話の時代よりただの一度も敵の侵入を許した事は無いのだ。

ここに「祀られた」女神とその守護者は巨大なアテナ神像の前にいた。開かれた右手に乗っているのは翼ある勝利の化身？ニケ、左手が添えられているのは聖楯イージスである。その荘厳で慈愛に満ちた姿はどんなに深い闇の中にも光明をもたらしてくれるようだ。

「あなたと初めて出会ってから、何年になるのでしょうか」

アテナはふと思い付いたように、カライスの方を向いて言った。

「13年です。あの頃、貴女は私の身長半分位でしたね」

「そんなに小さかったかしら...」

カライスの言葉に、アテナは遠い昔に思いを馳せた。

人の身に生まれた地上の女神だと分かって聖域に連れてこられた時、彼女はたったの4歳だった。女神の栄えある近衛兼世話係に任命されたカライスは14歳であった。それ以来二人はずっと一緒に「主人と家来」と言うよりは「妹と兄」と言っただ方が良いような、気の置けない間柄である。

「ゼテスに会った時は驚いたわ。あなたと全然見分けが付かなかったもの」

「私か兄か当てる遊び、しましたね。外したのは最初の一回だけでした」

カライスは懐かしそうに微笑んだ。

「ゼテスは馬鹿らしいと言わんばかりの態度だったわ」

「申し訳ありません…兄は生まれた時からああいう人なのです」

「いいの。だからあなたとゼテスの見分けが付くようになったのよ」

二人は声を立てて笑った。裏表の無い空間。彼女は束の間不安を閉じ込めて置けた。

教皇アトレウスは玉座の上で黙考していた。

昨晩老体に鞭打って登ったスターヒル - 教皇以外出入りが禁じられている、地上で最も天に近い場所 - での事が気掛かりであった。スターヒルは代々の教皇が吉凶を占う天体の観測所で、教皇は特にある一つの星に注目しなければならぬ - 小熊座の尾の首星？北極星だ。

本来この星は、天頂より約1度離れた場所で輝いているものだ。しかし、250年に一度、その角度が0になる時がやって来る。その時、全ての聖闘士はアテナの為持てる力全てを尽くして戦わなければならない。例え命を棄てたとしても。

教皇が前回、前々回と北極星を観測した時より、今回は明らかにそれは天頂に限りなく近づいているのだ。

これでは、「その時」が来るのは時間の問題である。聖闘士の数も揃わないというのに…殊に、最下級の青銅聖闘士ブロンズセイントでも、神話の時代よりアテナの側に常にいて闘ったというあの聖闘士がいないのだ。

「失礼致します」

教皇の間の扉が、重々しい音を立てて開いた。

精悍な顔つきをした青年が一礼して入って来た。勇壮な長身には聖闘士の防具^{クロス}？聖衣が纏われている。その色はまばゆい黄金色だ。

「山羊座^{カプリコーン}のユバルホークか。如何した」

「実は、聖域北の遺跡の方角から、とてつもなく邪悪な気配を感じるといふ報告を受けまして…調査したいのですが」

教皇はぞくつとした。思わず声が大きくなる。

「黄金聖闘士達をここへ集めて参れ。話はそれからだ」

「…と申しますと…！？」

ユバルホークは気が付いたようだった。僅かに眉間に皺を寄せる。教皇は頷いた。

「去る壮絶な戦いより250年…再び、冥王ハーデスとの聖戦が始まるのだ」

迫る時

The Time Is Near

小一時間後、教皇の間には八人の黄金聖闘士、そしてアテナとカライスがいた。二人は教皇が直接アテナ神殿まで行って呼んできたのだった。玉座の横にはアテナとカライス、正面に黄金聖闘士達が片膝を付いた状態で二列に整列した構図だ。普段滅多に顔を合わせることの無い黄金聖闘士同士が大勢で、しかもアテナと一カ所に居合わせるのは極めて希なことである。

「この度君達を集めたのは他でも無い…直に始まるであろう、冥王ハーデスとの聖戦について少し話があるからだ」

教皇の言葉で、その場に在る者全員に緊張の波紋が広がった。アテナは「やつぱり」という顔でカライスをちらりと見やった。カライスはそれに気づき、眼で返事をした。

「動かざる星・北極星、この星が天頂に来ると冥王との聖戦が始まるという。私はこの所スターヒルにて北極星の位置を観察し続けて来たが、それが天の中心に近くなる速度が急激に速まっているのだ。これでは、聖戦が始まるのは時間の問題…遅くとも、三ヶ月後かも知れぬ」

教皇はそう言っ下を向いた。黄金聖闘士達の間でどよめきが起る。アテナも思わずゴクリと唾を飲み込んだ。

「教皇…!」

「聖闘士の数もろくに揃っていないというのに!?!」

「…承知しておる」

攻撃的な口調で言った者があつたが、教皇は厳かにそれを制止した。教皇を批判するのは筋違いというものだが、教皇はそういう心境を察した。

「事態を予測できなかった私の過失だ、本当に申し訳なく思っている。しかし、聖戦はまだ始まってはいない。落ち着いて聞くのだ。確かに言う通り聖闘士の数が足りないのは明白だ、しかしそれを解決するのは焦りでは無かるう。今この場に居ない四名の内、三名が居ない理由を考えてみよ。聖闘士候補生の修行の為のはずだ。彼らが使命を果たすこと……直前まで、それを待つてみるのだ」

「……」

教皇の静かだが力強い言葉に、場は再び静まった。

「さて、本題だが、先程ユバルホークより伝達があつた。聖域北方の遺跡群から強大な邪悪な気配を感じるといふ報告を受けたため、それについての調査をしたいとのことだ」

前列の一番右にいたユバルホークは、顔を床の赤絨毯に向けたまま首を縦に振った。

「無論調査を許可する。しかし一つ、あの遺跡群は前聖戦の冥王軍拠点・ハーデス城の跡である事は全員聞き及んでおろう」

場の沈黙は肯定を意味していた。

「『跡』とはいえ、十二分に危険性を孕んだ場所であるのは間違いない。そこで、山羊座のユバルホーク、射手座のシルヴェラよ」

「はっ」

「何でしょうか」

ユバルホークと、後列左から二番目にいた者が顔を上げた。シルヴェラは小柄な、十代半ばと思われる少年だ。明るい茶色の短髪と大きめの瞳がまだ子供っぽさを残しているが、背に翼のある黄金聖衣を纏ったその姿には威厳さえある。

「私は、君達二人が適任だと判断した。異論の有る者は？」

声を上げる者は誰一人いなかった。

「それでは二人とも、頼んだぞ。聖域内の青銅聖闘士、白銀聖闘士シルバーセイを何名か選び出し、早速調査に向かうのだ」

「御意」

二人は立ち上がって一礼をすると、入り口の巨大な扉を開けて退出した。

「残った六名よ、話はこの通りだ。冥王復活の兆しは見え始めてきた…君達是最強を誇る黄金聖闘士だ。しかし、その力を過信すること無く、日々精進してもらいたい。以上だ」

その言葉を聞き終えると、六人の黄金聖闘士達はおのおの立ち上がって教皇の間から退出し始めた。

ところが、その中で一人玉座の横に控えている二人の元へとやってくる者があった。

「兄さん」

カライスはやや驚いたように、その人物の顔を見据えて呟いた。見事な長身、優美な藍色の長髪、そして繊細で彫刻の如き顔立ちは

カライスと一部たりとも変わらない様に見えた。ただ、その身に纏う
雰囲気は峻烈を極め、カライスの温和なそれとは全く質が異なる。

「俺は自分の宮を守るのが仕事かもしれん。だがカライス、何か
あった時真っ先にアテナを守るのはお前の仕事だ。…これから頼
むぞ、我々の女神を」

それだけ言うと、カライスの生き写しは身を翻して扉の方へと歩
んだ。言い方はぶっきらぼうであったが、どこか優しかった。

「…ありがとう、ゼテス兄さん」

カライスは微笑み、兄に向けてそう言った。アテナと教皇が、視
界の端で頷いているのが見えた。

ユバルホークとシルヴェラは、白銀聖闘士三名と青銅聖闘士二名と共に聖域北部の荒野を進んでいた。

本来なら年齢的な面でもユバルホークがリーダーとして行動するのが妥当なところだが、一行を先導しているのは意外にもシルヴェラであった。聖衣の背の翼のせいで、走っているというよりも飛んでいるように見える。

「シルヴェラ、ちょっと速過ぎないか。付いていけないぞ」

シルヴェラの後ろをやや遅れてついて行っているユバルホークが、他五人の気持ちを代弁するかのように言った。

「分かりましたって」

反抗期の子供染みた返答をすると、シルヴェラは羽ばたきの速度を遅くした。概して黄金聖闘士は俊足だが、シルヴェラの足の速さは群を抜いている。足が速い方のユバルホークでさえ付いていけないのだから、まして他の者は尚更だ。

「ライノ、遺跡の方角から邪悪なものを感じたのは、朝になつてからいきなりか？」

ユバルホークは一番後ろを走っている少年に前を向いたまま声を掛けた。彼はユバルホークの弟子で、一角獣星座の青銅聖闘士だ。
ユミコン

朝異変を感じたことを師に伝えたのはライノである。

「正確には、昨日の晩口ドリオ村にいた時に感じたんです」

ロドリオ村は、聖域に最も近い村だ。教皇アトレウスもよく表敬訪問している。聖闘士には馴染み深い場所だ。

「…一緒に居たアンキセスも、何か感じたと言っていました。けれど、割と一瞬の事だったので、言うのはそんなに急がなくてもいいかなと思って…」

罪悪感を感じたのか、ライノは言葉を切り明るい水色の瞳を曇らせて下を向いた。隣を走っている大柄な少年 - 大熊座のアンキセス^{ペアー}もうつつむいている。しかしユバルホークの対応は穏便だった。

「そういう事は、自分で判断せずにすぐに俺達に伝えるんだ。もしかしたら、重大な事かも知れないんだからな。…だが、言ってもらえた分には良かったぞ。ありがとう」

「は、はい！」

少年達の表情はぱつと明るいものに変わった。

「隊長、おかしいと思いませんか」

何分かして、そう言ったのは白銀聖闘士・蛇遣い星座のエリンナ^{オレユクス}だった。一行の紅一点で、有数の実力とすらりとした肢体の持ち主だ。黒髪緑眼の美女だが、「女性聖闘士は仮面を付けなければならない」という掟に従ってその麗しい顔を隠している。

「何が？」

シルヴェラが返事をした。ちなみに、「隊長」という呼称はシル

ヴェラがユバルホーク以外の全員に強いたものであるが、五人とも乗り気で使っている。

「遺跡が全然見えて来ませんね。そこまで遠い場所でも無いはずなのに…」

「あ…言われてみれば、確かに」

遺跡は聖闘士の足なら二時間もかからないような距離にある。しかし、もうかれこれ一時間以上は走っているのに、影形も見えてこないのだ。

どういう事だろうか。

全員がそう思った矢先、先に行くシルヴェラの姿が忽然と消えた。

「隊長!？」

白銀聖闘士、青銅聖闘士の五人はうろたえて足を止めた。

眼前はただのただっ広い荒野で、遙か向こうに町の建物が見えているばかりだ。

シルヴェラの気配も影も無くなっている。

「何処へ行っただ…?」

ユバルホークも足を止めて辺りを見渡し、そう呟いた。しかししばしの間考え込んだ後、躊躇無く再び走り出した。

「大丈夫だ。行くぞ」

後ろを向いて、手で「まっすぐ行くぞ」と合図をする。

「え？」

「保証はする」

困惑している五人をよそ目に走っていたユバルホークの姿も消えてしまった。

「全員着いたね」

シルヴェラの声だった。彼は倒れた柱に乗って五人の方を見ている。ユバルホークも、もともとは此処にあった建造物の入り口だったと思しき場所に立って待っていたらしい。

五人は、このほとんど岩石の土台と崩壊した柱以外に何も残っていない場所が、一行の目的地であるということはずぐに理解できた。しかし、一体どうなっているのか。

「ここには、結界が張られている」

五人の心の内を見透かしたようにユバルホークが言った。

「ちょうど、聖域全体に張られているやつ様なものだ。普通の人間にはその存在すら知覚する事の出来ないように施された。少しものが違うが、そんな所だろう」

「なるほど、それで遺跡が外からは見えなかったんですね。そして、隊長が消えたのも…」

「そうだ。結界の中に入ったからだ」

合点がいった背の高い白銀聖闘士の少年・ペルセウス座のレイファートにそう答えると、ユバルホークは何時にも増して深刻な顔になった。

「…しかし、最近になって急に此処に結界が張られるとは…やはり、冥王復活の前兆なのだろうか。それに、この邪悪な小宇宙^{コスモ}…」

遺跡の上空を覆っているのは暗雲で、結界の外の爽やかな朝の空とは全く違っていた。今にも豪雨が降り出すか雷鳴が轟きそうである。そして、場所全体に充満しているのは気分を害するほど強烈な邪気であった。例えるならば何者かの憎悪・怨恨を思わせるような

「あれは、何だろう？」

不意にシルヴェラが柱の上からそう言った。その眼はかなり広い遺跡の中心方向を見ていたが、そこから尋常では無い邪気が発せられているのが全員に分かった。

「行ってみようか」

シルヴェラは柱から軽やかに飛び降りると、視線の先へと向かった。他の六人もそれに付いていった。

「これは…」

一本の剣だった。

円形になった、祭壇の様な部分の中心にしっかりと刺さっている。銀色と言うべきか、闇色と言うべきか、荒廃したこの遺跡の風景には似つかわしくない程の光沢を放っている。刀身には神秘的な文字が彫っており、その柄の部分には血の赤をした宝玉がはめ込まれている。

しかしそれは美しいという以上に、何か生々しく毒々しい雰囲気醸し出していた。事実、邪気はここから発せられていた。

「剣…？」

シルヴェラがそれに近づいた瞬間。

「うつ！？」

剣を一瞬包んだ暗黒の結界によって、シルヴェラは吹っ飛ばされた。

地面に背中を叩き付けられる。

「シルヴェラっ！！！」

「俺は大丈夫…だけど、聖衣を着ていなければ、大惨事に違いな
いよ…！」

ユバルホーク始め、六人が倒れたシルヴェラに駆け寄った。怪我
をしていないとはいえ、相当痛そうに顔をしかめている。

「今の衝撃は、一体…」

「それはハーデス様のご意思の強さです」

「！？」

一行の背後から声がした。振り向くと、そこに立っていたのは女
だった。つややかなぬばたま色の長髪、漆黒のドレス、黒く塗られ
た爪。妖艶なうら若い女であった。

しかし、真っ先に覚えたのは戦慄だった。

「何者だ！」

ユバルホークは手刀を構えて一喝した。シルヴェラも立ち上がり、

聖衣の背から黄金の弓矢を出し女の心臓向けて番えた。

女はその牽制をもともしないかのように言い放った。

「私はパンドラ。冥王ハーデス様の下僕にございます」

闇の剣

Sword in the Darkness (後書き)

いよいよ次話戦闘シーン&冥闘士 - ただしオリジナル - の登場です。
乞うご期待！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2929y/>

遙かなる聖戦

2011年11月17日19時05分発行